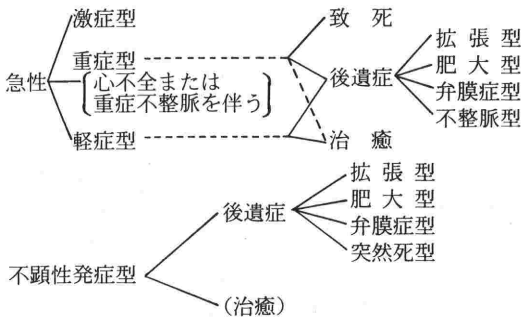


小児心筋炎と特発性心筋症

大 国 真 彦*

小児期はいろんな疾患が最も純粋なかたちで観察できる時期といえることができる。今問題になっている心筋炎にしても、成人では高血圧とか冠動脈硬化症による修飾を常に念頭におかねばならないし、またどこまでが心筋炎による障害かを決めるのは困難なことが少なくない。しかし小児では、純粋に心筋炎だけの経過として観察できることが多い。

一方特発性心筋症はいわゆる難病の一つとして知られ、名のごとく原因不明の疾病で、肥大型と拡張型に分けられ、また家族性のものと非家族性のものがある。しかし最近の特発性心筋症のうちかなりの症例はウイルス性あるいは特発性心筋炎のなれの果てではないかと考えられ始めている。



(ただし、後遺症例では慢性心筋炎の存在を考慮)

第1図 経過よりみた特発性心筋炎の分類(大国)

われわれは特発性心筋炎を臨床経過より図のように分類している¹⁾。急性激症型はいわゆる Fiedler 型と呼ばれるもので、新生児と老人に起こりやすい。死亡する例が多いが回復する例もある。しかしこのような乳児の流行性心筋炎の中に

心筋間質に線維増殖がおこる例があることはすでに1947年に Stoeber²⁾ により記載されており、また Bengtsson³⁾ らは、急性心筋炎が疑がわれる例を5年間追跡し、そのかなりの例に心拡大、working capacity の異常を認め、心筋炎の後遺症が少なくないことが認められている。

著者ら⁴⁾ の経験でも、4歳の時発熱の後心不全を示し、急性心筋炎と診断された例が、その後心電図上左側胸部誘導のR波の増高を示し、心肥大の進行が疑われた。この例は自覚症状が全くなく元気に生活していたが、発症5年後交通事故で死亡し、剖検により著しい心室壁の肥厚と線維化が認められ、また心筋にγ-グロブリンが附着していることが蛍光抗体法により認められた。この例はもし成人にまで成長し、心筋炎の既往歴がはっきりしなくなれば特発性心筋症と考えられうる症例といえよう。

また一方心不全を伴う急性心筋炎のあと心拡大と心不全が持続し、慢性心筋炎と考えられる例がある。このような例はもし出来上がった臨床像のみをみれば拡張型心筋症との鑑別は極めて困難である。

最近心筋生検により比較的新しい心筋炎は診断されるが、しかし発症後経過が長引いてしまえば拡張型心筋症か、心筋炎かの区別はかなり困難になる。

著者らは小児例で心筋炎の既往歴がなく、胸部エックス線写真上の心肥大、心エコー図で心筋肥厚を認め、肥大型心筋症と考えて経過を観察していた例において、5~10年の経過で心エコー図、心電図および胸部エックス線写真上すべての異常所見が次第に軽快して正常化してゆくものを数例経験している。これらの例はおそらく不顕性の心

*日本大学医学部小児科学教室

筋炎による心筋炎後心肥大がおこり、これが次第に軽快していったものと考えている⁵⁾。

このようなところから図に示したような心筋炎の分類がなされたのであるが、急性心筋炎のばあい、ウイルスの心筋障害力と個体の防衛力のバランスから心筋が侵される度合が種々になる。心筋の侵襲が軽度であればおそらく後遺症なしに完全に治癒するのであろう。心筋侵襲が中等度であれば残された心筋が反応して心筋炎後心肥大を起こして代償するのであろう。また心筋侵襲が高度であれば多少心筋肥大として反応しても不十分で拡張型心筋症の病像をとり、心不全が持続することになるものと考えられる。

なお一部の心筋炎例においては炎症が持続して慢性心筋炎の経過をとるが、そのプロセスには何か免疫学的機序が働いているものと考えている。これは著者らの成績では胸線の重量が心重量の増加と関連していることが認められており、今後検討を要するものと考えている。

次に家族性の問題であるが、一般に家族性心筋症は重症のばあいが多くとされている。しかし家族性にも疾患そのものが遺伝すると考えられるばあいと、何らかの体質が遺伝すると考えられるばあいがある。

著者の経験でも⁶⁾ 5歳の姉が慢性心筋炎で死亡し、3歳の弟の検診を行って異常を認めなかった。しかし約1年後発熱後心不全をきたし、姉と同様の心筋炎と診断され、1年11か月の経過で死亡した。この例はおそらく家族性にある種のウイルスに感受性の強い家系かと考えられるものである。

いずれにせよ従来特発性心筋症と考えられている例については、心筋炎後遺症の可能性を常に念頭において診察を進めるべきものと考えられる。

文 献

- 1) 大国真彦：小児の心筋症，病理と臨床 1：555-558，1983.
- 2) Stoeber, E.: Ueber das "Schwielenherz" des Säuglings. Z. Kinderh, 65: 114-154, 1947.
- 3) Bengtsson, E. and Lamberger, B.: Five-year follow-up study of cases suggestive of acute myocarditis. Amfr. Heart J. 72: 751-763, 1966.
- 4) 大国真彦他：小児特発性心筋炎の疫免と病理，とくに免疫の関与について，小児科臨床 27：1321-1328，1974.
- 5) 大国真彦，宇佐美等：肥大型心筋症と心筋炎後心肥大との関係について，厚生省特定疾患特発性心筋症調査研究班昭和57年度研究報告書 p. 211-213.
- 6) 大部芳朗，大国真彦他：慢性孤立性心筋炎，日本臨床 21：293-307，1963.

* *

* *

* *

* *

* *

* *